

なぜ働いていると本が読めなくなるのか（2024.4）集英社新書 第6章～

三宅香帆（文芸評論家）

余録 女性セブン7月25日号の筆者インタビュー記事等より

8月担当者が購読しているサブスク楽天マガジンの週刊誌ジャンルに三宅香帆のインタビュー記事が掲載されていたのでご紹介、その他著者のXやWikipedia等Webサイトも参照。

京都大学大学院で萬葉集の研究が専門であった。研究も好きだったが、それ以上に研究の楽しさや、萬葉集の魅力を伝えることの方が好きだと気付く。大学在学中に、カフェ・バーも営業する独立系書店京都天狼院書店の店長に就任し、文芸評論家として活動していた。その後、研究者と評論家の兼業より、兼業を認めていた企業で働くことがよいと考えリクルート社に就職するも、本を読めていない自分に気づき3年半で退職し文筆専業となる。2022年に結婚（夫が三宅性に変更で話題）

本著は労働と文化がテーマの映画「花束みたいな恋をした」の批評となるものにしたかった。当初集英社のWEBサイトで連載していたものを、反響が大きく新書として出版した。新書としては珍しいパターン。

映画「花束みたいな恋をした」（監督土井裕泰、脚本坂元裕二、主役菅田将暉と有村架純、2021年制作）東京・京王線の明大前駅で終電を逃したことから偶然に出会った山音麦と八谷絹。好きな音楽や映画が嘘みたいと一緒に、あっという間に恋に落ちた麦と絹は、大学を卒業してフリーターをしながら同棲を始める。近所にお気に入りのパン屋を見つけて、拾った猫に二人で名前をつけて、渋谷パルコが閉店しても、スマスマが最終回を迎えても、日々の現状維持を目標に二人は就職活動を続けるが…。主人公の男女による5年間の関係性の変化を描く。略称は「はな恋」

第6章 女たちのカルチャーセンターとミリオンセラー —1980年代

1987年、俵万智『サラダ記念日』が280万部のベストセラーとなった。因みに8月担当者の誕生日はサラダ記念日7月6日である（どうでもよい）。

筆者はこの詩集が若者たちの心を掴んだ80年代と現代とを比較し、時代背景の変化を実感するが、「若者の読書離れ」という言葉は変わらない。日本人はほぼ半世紀もの間「若者の読書離れ」を憂いてきた。

80年代の長時間労働が増加しているのに、90年代2兆円を超える売り上げを伸ばした出版業界の状況を考えると、何をもって「若者の読書離れ」と言えるのか。どうして読書文化が花開いているのか。

80年代の出版バブルを支えていたのは、「雑誌」であった。当時人気だった「BIG tomorrow」のコンセプトは、歴史小説から教訓を学ぶという教養主義的な側面はほとんどなく、もっと即物的に、明日使える読心術や心理話法といった知識を読者に提供することであったと、筆者は読者が求める書籍内容の質の変化を捉えている。※書籍の内容を味わうというより、断片的な役立つ情報や知識として物語りのあらすじだけを知るための読書などネタバレ的な読書に変容してきたのではないか。（8月担当者がそうであった。）

なぜ「BIG tomorrow」は売れたか。労働者に「学歴（教養）よりも処世術（コミュニケーション能力）のほうが大切である」という価値観が広まったからだと言筆者は言う。※実際に80年代を20歳代のサラリーマンとして過ごした8月担当者も「BIG tomorrow」はよく読んだ雑誌であった。細切れな知識や自らの行動を指し示すノウハウを欲していた気がする。「プレジデント」は高価で、明日の仕事に即役立つ感じがなかった

思い出がある。

しかし、雑誌ではない文芸物の「窓ぎわのトットちゃん」「ノルウェイの森」「サラダ記念日」がベストセラーになっているのはなぜか。それはコミュニケーション能力にコンプレックスを抱く者が、翻って「僕」「私」視点の物語を欲する、社会ではなく、「僕」「私」の物語を読みたがっていたのではないかと筆者は言う。※面白い視点だが、コミュニケーション能力へのコンプレックスがこれら文芸物に走る要因だろうか？各書籍の魅力は、個人のコンプレックスよりの希求からだけではないのではないか。

一方、一世帯当たりと規定すると書籍購入額は1979年をピークに減少、書籍離れがはじまっていた。80年代ミリオンセラーが登場したのは単に人口増の恩恵であると筆者は言う。※本当に人口増で済ませてよいだろうか？書籍の内容の魅力や書籍の売り出し方にも工夫があったのではないか。

また、80年代も学歴コンプレックスゆえに教養を求める傾向は消滅していなかった。その舞台となったのは、当時一種のステイタスシンボルとなった、料理、華道、小説、現代思想など多種多様な習い事講座を提供するカルチャーセンターであった。カルチャーセンターの受講生は8割が女性であり、そこで学ぶことが、学歴コンプレックスを埋めるための社会的教養を身につける行為だった。エリート層は、その行為をからかい、優越感からくる攻撃を行うのは階級格差の問題ではなかつただろうかと言う。現代の大学を冠するユーチューブやオンラインサロンを蔑視することに通じているのではないか。これは「若者の読書離れ」という言説も、エリート層の優越感を確認するための言説であると指摘されている。読書は常に階級の差異を確認し、そして優越を示すための道具になりやすい。

80年代とは、それまで男性たちの中で閉じられてきた「教養」が、女性たちに開かれた時代だった。女性の権利獲得からはじまるフェミニズムという学問が、メディアを通して一般向けに開かれ、大衆化していった時代の運動そのものだった。※6章で述べられていた80年代の教養とコミュニケーション能力、教養と女性の社会進出については、階層格差の問題として一括できるのではないか。

第7章 行動と経済の時代への転換点 —1990年代

90年代の前半、平成の幕開けとともに「さくらももこ」の時代が到来し、平成の終わりとともに幕を閉じた。さくらももこはエッセイを、読者を女性に限定するのではなく、誰でも読める文章に開いた。※この論説は説明不足の感があり、よく分からない。

さくらももこに限らず90年代当初は、心への興味、心霊現象への関心、霊的、精神的、スピリチュアル的な感覚が広まった。しかし、書籍や心理テストの番組、雑誌など、自分とは何かという自分探しの「自己」を探求する傾向でスタートした90年代は半ばを経て「内面」の時代から「行動」の時代に移行していった。

350万部の年間ベストセラー1位となった1995年出版の「脳内革命」は、心理テストや心理学のような抽象的な議論でなく、イメージトレーニングやポジティブ思考という行動によって、内面を変えることを促す点が新しかった。内面重視から行動重視へ、90年代にベストセラーで起きた転換点。これを機に自己啓発書がブームとなった。行動重視への転換の背景は、バブル崩壊後、高度経済成長の終焉、長い不況下の就職氷河期、非正規雇用増大などの労働環境の変化が背景にある。終身雇用制の安心感から、自分のキャリアは自己責任でつくっていくという価値観が広がっていったことが要因として語られる。政治の時代から経済の時代へと新自由主義的価値観を内面化した社会への移行が90年代であった。「そういうふうになっている」ものを変えることはできない。だからこそ、ポジティブ思考で自分の行動を変えるしかない時代であった。

一方、読書離れについては、長時間労働は現代にはじまったことではなく、長時間労働が読書時間を奪ったというだけでは90年代後半以降の書籍購入額減少の説明はつかず、映画「花束みたいな恋をした」の麦のスマートフォンでゲームをする時間はあっても読書はできない状況を解明していく必要がある。

また、反比例のグラフのような自己啓発書の売り上げの伸びと読書離れの関係はなぜ生まれたかの説明も必要である。

その答えの一つとして、自己啓発書の特徴は自己のコントロール可能な行動の変革を促し、他人や社会といったアンコントロール可能な変えられないものはノイズとして除去する姿勢を重視している。自己啓発書が売れる社会とはノイズを除去する行動を促す社会である。自己啓発書に対し、文芸書や人文書といった行動ではなく、社会や感情について語る書籍を読むことは、アンコントロール可能なものを知る、人生や働くことのノイズとなり除去されるべき存在である。これが文芸書などからの読書離れ、なぜ働いていると本が読めなくなるのかの要因のひとつとしているという。ノイズのある読書より、ノイズのないコントロール可能な娯楽であるスマホゲームに走ることになるという。※担当者はスマホゲームをやったことがないので、パズドラがコントロール可能なものとは捉えられない。私にとってはスマホゲームは勝手の分からないアンコントロール可能なノイズとしか言いようがない。ネット上で麻雀や数独はよく行うが・・・。

教育界では斉藤喜博～西郷竹彦～大西忠治～大村はま～法則化運動と、教師の自己変革・自己責任を促す教育実践が展開されていた時期ではなかったか。

※8月担当者は、過去と他人は変えられないが、自分と未来は変えられる（エリック・バーン）という言葉をよく使った。授業がうまくいかない時も、言い訳を他に求めず、自分の力量不足を原因として研究・工夫していた思い出がある。

第8章 仕事がアイデンティティになる時代 -2000年代

2000年代以降の日本社会は「仕事で自己実現すること」を称賛する時代となった。その影響でやりたいことを仕事にすべきだという風潮になり、ニートをつくりだす要因となった。若者はバブル崩壊により消費で自己表現することが難しくなり、労働そのものが「自分探し」の舞台となった。仕事への過剰な意味づけ「自己実現系ワーカホリック」が誕生した。

教育界は、校内暴力、非行、いじめ、不登校、落ちこぼれ、自殺など、学校教育や青少年にかかわる数々の社会問題を背景に、知識偏重型の教育から生きる力を育む個性尊重のゆとり教育への転換がはかられた時代。総合的な学習の時間の創設。そんな時代、自分の「好き」を重視する仕事を選ぶことを良しとする「13歳のハローワーク」がベストセラーとなっている。※筆者の「著書に記された作家論を20代で作家として鮮烈なデビューをかました村上龍だけには言われたくねえ」という皮肉が8月担当者は非常に面白かった。

※詰め込み教育時代の子どもたちをとりまく問題のうち、校内暴力は影を潜めたもののいじめや不登校、学力格差など現在も大きな社会問題となっており教育改革の方向は間違っていないのか。3年B組金八先生シリーズが各時代の教育問題を反映していた。2011年に終了。

2009年に全ての年代で前年度よりも読書量が減少した。IT革命、インターネットによる「情報」の台頭が背景にある。それはベストセラー小説「電車男」からも「情報」の価値が読み取れる。糸井重里は、インターネットの本質は「リンク、シェア、フラット」にあると言う。筆者は匿名性によるフラット性というよりも、情報強者が、情報弱者である旧来の権威を転覆するような社会的ヒエラルキーを無効化する「2チャンネル」に代表される転覆性であると論ずる。

「2チャンネル」の創始者ひろゆきの情報発信を従来の「人文知」に対して「安手の情報知」「安直で大雑把」と批判があるが、果たしてこのような新種の知は本当に「安手」だろうか？と筆者は問う。現代人の、読書よりインターネットの情報を好む理由は、実はここにあるのではないかと論じている。読書的人文知とインターネット的信息を隔てるものは何か。

それは、求めている情報だけを、ノイズが除去された状態で読むことができるのが「インターネット的情

報」であるからであると論じている。

そして2000年代益々売り上げを伸ばしている自己啓発書とインターネット的情報の共通点は読者の社会的階級（文化資本・教養）を無効化する性質があるところであるという。このような性質は就職氷河期の若者が勝者になるべくして求めていたものであり、昭和的な一億総中流社会が崩れ去り、バブルの崩壊、リーマンショックなどの景気後退などで自分の階級の低さに苦しめられていた人々のニーズに応えるものだった。このような人々にとって過去や歴史とはノイズであるという。読書で得られる知識とインターネットで得られる情報の大きな差異は、知識のノイズ性なのだ。情報にはノイズがない。情報は知りたかったことだけを指すからである。そして、情報とはノイズの除去された知識と言える。読書は欲しい情報以外の文脈やシーンや展開そのものを手に入れるには向いているが、一方で欲しい情報そのものを手に入れる手軽さや速さではインターネットに勝てない。ノイズのない情報の価値は上がり続け、読書のような偶然性を含んだ媒体が遠ざけられるのは当然の結果であるという。

本著「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」の原因は、単に労働時間の問題ではなく、読書という趣味を私たちはどうやって楽しむことができるのかという問題と向き合う必要があるという。読書を楽しめる社会実現の為の働き方、心の持ち方の問題へと話題は移っていく。

第9章 読書は人生の「ノイズ」なのか？ —2010年代

「人生の勝算」「多動力」など2010年代のビジネス書（自己啓発書）には、ノイズを除去したコントロール可能なもの（自己の行動変革、行動量増強）に注力することが仕事（人生）の成功を収めると記されている。そして、自己決定・自己責任が重視された新自由主義を内面化させた自己決定権の大切さを説いている。そこには仕事や社会のルール自体を疑い正そうとする発想はない。

しかし、2010年代後半に時代の変わり目が訪れた。電通労自殺事件である。働き方改革という言葉が叫ばれ長時間労働の歴史が変わろうとしていた時代である。時代の流れに伴って、会社や組織に頼らず個で稼げ、副業、フリーランス、ノマドワーカーがもてはやされる状況が出現。このような働き方改革と引き換えに受け取ったメッセージは、自分の意思を持って。グローバル化社会のなかでうまく市場の波を乗りこなせ。ブラック企業に搾取されるな。投資しろ。自分の老後資金は自分で稼げ。集団に頼るな。であった。この働き方改革の時代性を背景として、読書の世界にも、働き方や働くことの是非を表現した労働小説が勃興しブームとなった。ポトスライムの舟、下町ロケット、何者、コンビニ人間などが、芥川賞や直木賞を受賞している。※8月担当者も、次男から勤務する企業の全国各事業所が撤廃され、自宅から直接顧客への営業形態になったという話に驚き心配したが、本著で知ったノマドワーカー的勤務なのかと納得した。また次男の嫁はフリーランスであり、次男が国内外どこの勤務になっても自分の仕事はオンラインですべて完結でき、次男と一緒にいられるという。働き方も多様になったと感じている。

この時代、スマートフォンの保有率が急増し、SNSの急激な普及が読書量減少の大きな原因になったかという点、SNSより「仕事や家庭が忙しくなったから」と感じる方が圧倒的に多かったという調査結果が出た。本書のタイトル通りの現象である。加えて読書の目的が娯楽から情報取得へと変わってきた。つまり本を読む行為が映画の早送り鑑賞のように、読書（ノイズ込みの知）の目的が、学問性や娯楽性である味わう行為から、労働にとって必要な情報（ノイズ抜き知）をいかに得るかという行為に変わってきたという。

読書は今後ノイズとされていくしかないのだろうか？情報として獲得した知識でも、フリッパーズ・ギターの例のように、その情報が自分から離れた他者の文脈に触れる教養となる場合もある。ノイズ性を完全に除去した情報だけで生きるのは無理なのではないか。自分の骨は、自分で拾えない。自分の人生の文脈以外

も、人生には必要なのである。つまり情報は、自分の外側にあるノイズである文脈の入り口かもしれないというのである。大切なのは他者の文脈をシャットアウトせず、仕事のノイズになるような知識をあえて受け入れることであるという。コントロールできる情報だけではなく、ノイズである本を味わう読書を推奨する本好き読書好きの著者の主張が述べられた。

読書とは自分から遠く離れた文脈に触れること。本が読めない状況とは、余裕がなく、仕事以外の文脈をノイズだと思ってしまう状況である。だから、全身全霊で働くのではなく、半分は仕事、半分はほかのものに使う半分で働く社会こそが、働きながら本を読める健全な社会ではないだろうかと主張する。

最終章「全身全霊」をやめませんか

9章までで述べられた労働と読書の変遷が図表でまとめられている。余裕をもって半分で働く為に、本当に長時間労働が必要なのかを問うている。長時間労働は高度経済成長を成功させた日本企業の必要悪だったかもしれないが、現代の私たちにとって、メンタルヘルス悪化や企業業績悪化につながる傾向の原因となっている。その働き方は現代に合っていない。では企業が長時間労働の強制をやめれば働きながら本を読める健全な社会をつくることができるのかというと、実はそう単純ではないという。20世紀は、敵は組織や命令といった外部であったが、21世紀の新自由主義社会の能力主義社会は、敵は自分の内部にあり、自発的に頑張りすぎて疲れ、うつ病や燃え尽き症候群の発症といった疲労社会であるからである。行動が基軸となっている新自由主義社会では、強制されなくとも、個人が長時間労働を望んでしまう社会構造が生まれている。頑張りすぎると、人は壊れる（バーンアウト）のは分かるが、頑張らないと仕事にならない。バーンアウトの本質的な原因として、現代社会がトータル・ワーク（生活のあらゆる側面が仕事に変容する社会）文化になっていることだとマレシックは語る。我々はトータル・ワーク社会に生きていること、そしてだからこそ本を読む気力が奪われてしまうことを自覚する必要がある。「全身」のコミットメントを求めてくる、それが資本主義社会の果てしない欲望である。そして、我々にとっても仕事に限らず何事も全身全霊のコミットメントは、何も考えなくてよいので楽であるという。しかし、全身全霊のコミットメントは楽だが、過剰な自己搾取はどこかで破綻し、メンタルヘルスを壊す。全身全霊のコミットメントを称賛・信仰する社会をやめるべきである。半分で関わる社会こそ理想であり、トータル・ワーク、働きながら本を読めない社会からの脱却の道である。本書の提言はここにある。

※8月担当者自身もフルタイムで勤めていた65歳までは、全身全霊タイプであった、その後、パートタイムになり3年経過した現在、仕事以外の音楽や旅行、映画、グルメなど趣味にも多くの時間を消費するようになっているが、フルタイムで働いていた時と比べて何か物足りず充足感がない。この読書会の資料を作成していた数日間は他のことを忘れて没頭でき、とても充足感があった。資料作成は激務とは言えないものの「自分を忘れるために激務に走るな」と説いたニーチェに笑われそうだ。

あとがき 働きながら本を読むコツをお伝えします。

- ① 自分と趣味の合う読書アカウントをSNSでフォローする
- ② iPadを買う
- ③ 帰宅途中のカフェ読書を習慣にする
- ④ 書店へ行く（本が読めないと嘆いていた著者を救ってくれた）
- ⑤ 今まで読まなかったジャンルに手を出す
- ⑥ 無理をしない

筆者は全身全霊で働くのが好きなタイプの自分への戒めとして本著を執筆したと述懐している。